

# 「計量」形容詞対における言語転移容認度の比較研究 — 「重い—軽い」を対象として

A Comparative Study of Transferability between ‘Measure’ Adjective Pairs, ‘*omoi* and *karui*’

青谷法子

Noriko AOTANI

キーワード：言語転移、多義語、心的語彙、類推

Key words : language transfer, polysemic word, mental lexicon, analogy

## 要約

測定可能な数量に関連する形容詞の中には、「重い—軽い」「長い—短い」「深い—浅い」のように意味の上で対立するペアを形成するものがある。これらのペアは多くの場合対称的な多義の構造を持っている。本研究では日本人英語学習者に対し「重い」「軽い」を含むそれぞれ30通りの表現を提示し、英語への転移容認度を測定した。その結果、「重い—軽い」は対の概念であるにも関わらず、その転移容認度には差異があることが示された。「重い」「軽い」の転移容認度尺度として「+/-重量（基本義）」「+/-不快」「+/-深刻」の3因子がそれぞれ抽出された。「+/-重量（基本義）」および「+/-深刻」に関しては「重い」の方が「軽い」よりも転移容認度が高く、逆に「+/-不快」に関しては「軽い」の方の転移容認度が高いことが示された。その要因として、①意味の無標性・有標性、②意味のポジティヴ度について検討を行った。

## Abstract

‘Measure’ adjectives like *heavy*, *long*, and *deep* cover a scale of measurement. Such adjectives have two terms for the opposite ranges of the scale (*heavy/light*, *long/short*, *deep/shallow*). These sets of ‘measure’ adjectives have symmetrically structured polysemous senses. This study investigated the results of the language transferability tests administered to Japanese learners of English. They were given 30 Japanese phrases that contained ‘*omoi*’ (*heavy*) or ‘*karui*’ (*light*), and were instructed to make a judgment as to whether ‘heavy’ could be transferable as a translation of ‘*omoi*’ or ‘light’ could be transferable as a translation of ‘*karui*’. By factor analysis, it was possible to abstract several common factors that reflected the subjects’ recognition of the transferability of

'omoi' or 'karui'. Three common factors, which are +/-weightiness(prototypical sense), +/-seriousness, and +/-languidness were abstracted from the results. On the factors +/-weightiness and +/-seriousness, they judged transferability of 'omoi' as more acceptable. On the factor +/-languidness, they judged transferability of 'karui' as more acceptable. The reasons for these results are discussed in detail based on the theory of unmarkedness and the positiveness of the senses.

## 1. はじめに

第2言語を習得する際に、言語間の影響がどの程度の重要性を持つか、すなわち言語転移の問題は長年にわたり論争のテーマとなってきた。母語の構造は目標言語の表出や解釈に影響を与えることがあり、時にはそれがその目標言語の話者が表出・解釈するのとは全く異なるものとして、すなわち「負の転移」として表れることがある。このような負の転移に関しては、目標言語を習得する妨げになる要因（干渉）としてそれを究明するために、または言語教育者が学習者の問題点を特定する材料として、これまでに様々な研究がなされてきた。一方「正の転移」は母語の構造と目標言語のそれとの間に通言語的類似点が存在する場合に認められる現象であるが、目標言語の習得を容易にし、学習時間も短縮できる現象として注目をされてきた。しかしそのような正の転移も、母語と目標言語との距離が近い場合には有効であるが、日本語と英語のような距離の遠い言語間の学習に関しては懐疑的にとらえられてきた。

母語と目標言語との距離が近い場合における言語転移の研究結果として、Kellerman (1977, 1978) は、オランダ語と英語の語彙転移に関する興味ある知見を提供している。オランダ語を母語とする英語学習者にとって、対象言語である英語は母語と数多くの同族語を持つ距離の近い言語であると認識されている。しかしこの研究からは、オランダ人英語学習者が同族語を英語で使用する際に、母語での使用法をそのまま転用することに対し警戒心を示すということが実証されている。特に慣用句に関する容認度テストにおいて、母語であるオランダ語から英語への意味転移が容認できないと判断されるケースが多く認められ、逆に容認できる用法としては、「透明性」の高い用法、すなわちその語の中核の意味により近い用法で使用されている場合に限り、オランダ語での意味が英語にも転用できると判断されやすいことが判明した。

一方、認知心理学の分野からは、人間の思考と言語における創造的能力に関する多くの知見が提供されている。特に語の多義的な意味拡張のプロセスに関しては、いずれの言語においても基本的な意味からの比喩的な拡張のプロセスを経て一般化されながら意味拡張を遂げていることが明らかにされてきている（山梨 2000）。このことは、言語間の距離とは別に、言語普遍的な生物学的な思考形式や認知過程が存在することを示唆している。例えば日本語と英語の基本的形容詞の場合、「長い」と 'long' は、両者とも空間的な長さのみではなく、時間的な長さにも用いる

ことができるという点で共通しているし、「重い」と‘heavy’はその意味の広がりにおいて非常に多くの共通点を有している。

以上の知見を踏まえ、青谷(2003a, 2003b, 2004)では、日本人英語学習者(高校生・大学生)が日本語の形容詞「重い」から英語の形容詞‘heavy’への意味転移に関して、どのようなものについては容認可能と考え、またどのようなものについては容認できないと類推するのかについて、「重い」を含む30通りの表現に対して転移容認度調査を行った。その結果、「重い」の部分を‘heavy’に置き換えても表現できるという「肯定的評価」が、置き換え不可能とする「否定的評価」を有意に上回ったのは30通りの表現のうち、4通りのみであり<sup>i</sup>、逆に17通りの表現において「否定的評価」が「肯定的評価」を有意に上回っていた。すなわち、基本義以外の語義に関しては容認できないと類推する傾向が強く、日本人学習者には「重い」と‘heavy’とが距離の離れた概念として認識されていることが明らかにされた。

## 2. 目的

「重い」のような測定可能な数量に関連する形容詞は通常意味の上で対立する対の概念を持つが、それらの対概念が仮に我々の心的語彙の中で対称の形で存在するとすれば、対の一方での転移容認度はもう一方にも同じように適用されるはずである。逆に、たとえ対の概念であっても、転移容認度に差異が認められればそれらは心的語彙の中で別の形で整理されていることを示唆することになる。本研究では、形容詞「重い」の対の概念である「軽い」について、青谷(2003)と同様の調査を行ない、「重い」に対する容認度と「軽い」に対する容認度との間にどのような関係性が認められるかについて分析を行ない、日本人英語学習者の転移容認度の傾向性についての有効な知見を得ることを目的とする。

## 3. 調査の方法

### 3.1 調査対象および調査時期

愛知県内のA高校<sup>ii</sup>の生徒164名(男59名、女101名、不明4名)、および国内の大学生358名(男150名、女207名、不明1名)に対し、質問紙による調査を行った。調査は2004年1月～5月に行った。

### 3.2 調査の内容

形容詞「軽い」を含む30通りの表現例を提示し、「軽い」の部分を‘light’で置き換えても表現できるかどうかについて、「表わせる(1点)」「たぶん表わせる(2点)」「たぶん表わせない(3点)」「表わせない(4点)」の4段階のいずれかで判断させた。時間制限は行なわなかった。

今回の調査で使用した30通りの表現例は基本的には青谷(2003)の「重い」に対する転移容認度

調査で使用了らものと同一の表現を使用了らたが、一部「軽い」との共起の整合性から変更を加えた<sup>iii</sup>。また、30通りの表現の提示順序も「重い」の場合と同一にした。

### 3.3 分析の方法

本研究の目的は対の概念である「重い」と「軽い」の転移容認度の傾向を分析することであるので、まず、青谷(2003)で行った「重い」に対する調査結果<sup>iv</sup>と今回の「軽い」についての調査結果の両方についてそれぞれ転移容認度尺度を分析し、両者を比較検討することとする。

## 4. 結果と分析

### 4.1 「重い」の転移容認度の結果

#### 4.1.1 転移容認度尺度の分析

まず、「重い」を含む30項目に対して主因子法による因子分析を行った。固有値の変化は6.35, 3.25, 2.41, 1.66, 1.51, …というものであり、3因子構造が妥当であると考えられた。そこで、再度3因子を仮定して主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、十分な因子負荷量を示さなかった6項目を分析から除外し、再度主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。プロマックス回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を表1に示す。なお、回転前の3因子で24項目の全分散を説明する割合は45.4%であった。

第1因子は10項目で構成されており、「重い罪」「重い罰」「重い処分」など「重い」の辞書的意味分類<sup>v</sup>のうち「II 程度が高くて深刻な様子」に含まれる項目が高い負荷量を示していた。そこでこの因子を「+深刻」因子と命名した。

第2因子は10項目で構成されており、「気が重い」「重い心」「頭が重い」など意味分類「I 物理的・心理的に重量がある様子」の「心理的不快感」と「身体的不快感」に含まれる項目が高い負荷量を示していた。そこでこの因子を「+不快」と命名した。

第3因子は「重い石」「重い荷物」「重い体重」「重いドア」の4項目で構成されており、すべ

表1: 「重い」の転移容認度尺度の因子分析結果  
(プロマックス回転後の因子パターン)

項目内容	I	II	III
(22)罪	.79	-.10	.03
(23)罰	.78	-.07	.05
(17)処分	.64	-.02	-.03
(18)税金	.63	-.04	.08
(14)責任	.56	.13	-.04
( 2)罰金	.55	-.19	.10
(20)任務	.54	.09	-.09
( 4)病気	.46	.03	-.05
(24)役目	.43	.25	-.03
(28)労働	.38	.00	.09
(27)気	.05	.64	-.14
(11)心	-.01	.57	-.18
(10)頭	-.01	.55	.02
( 7)気分	.07	.54	-.19
(29)腰	-.08	.54	.20
(25)足取り	.01	.53	.20
(30)口	-.08	.51	.08
(16)まぶた	-.02	.50	.22
( 6)胃	-.10	.48	.08
( 1)雰囲気	.18	.35	-.15
(15)石	.04	.05	.89
(12)荷物	.06	.07	.83
(21)体重	.04	.05	.75
( 8)ドア	-.02	.03	.72
因子間相関			
I	—	.46	-.14
II		—	-.09
III			—

て「重い」の基本義に属する項目である。そこでこの因子を「+重量（基本義）」と命名した。

#### 4.1.2 下位尺度間の関連

「重い」を含む表現の転移容認度をあらわす3つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出し、「+深刻」下位尺度得点（平均 2.53, SD 0.58）、「+不快」下位尺度得点（平均 2.74, SD 0.53）、「+重量」下位尺度得点（平均 2.02, SD 0.90）とした。内的整合性を検討するために各下位尺度の $\alpha$ 係数を算出したところ、「+深刻」で $\alpha = .83$ 、「+不快」で $\alpha = .79$ 、「+重量」で $\alpha = .87$ と十分な値が得られた。

「重い」の転移容認度の下位尺度間相関を表2に示す。「+深刻」と「+不快」は有意な正の相関を示した。「+重量」と他の2つの尺度との間にはいずれも有意な相関は認められなかった。

表2：「重い」の転移容認度の下位尺度相関と平均, *SD*,  $\alpha$ 係数

	+深刻	+不快	+重量	平均	<i>SD</i>	$\alpha$
+深刻	—	.39 ***	-.05	2.53	0.58	.83
+不快		—	.02	2.74	0.53	.79
+重量			—	2.02	0.90	.87

\*\*\*  $p < .001$

#### 4.1.3 高校生・大学生の差の検討

高校生・大学生の差の検討を行うために、「重い」の転移容認度の各下位尺度得点について  $t$  検定を行った（表3）。その結果、「+深刻」下位尺度（ $t(434) = 0.41$ , *n.s.*）、「+不快」下位尺度（ $t(440) = 1.91$ , *n.s.*）、「+重量」下位尺度（ $t(445) = 1.58$ , *n.s.*）といずれの下位尺度においても高校生と大学生の得点差は有意ではなかった。

表3：「重い」の高校生・大学生別の平均値と *SD* および  $t$  検定の結果

	高校生		大学生		$t$ 値
	平均	<i>SD</i>	平均	<i>SD</i>	
+深刻	2.54	0.61	2.52	0.55	0.41
+不快	2.69	0.54	2.79	0.52	1.91
+重量	2.09	0.91	1.95	0.88	1.58

#### 4.1.4 高校生・大学生別の相関

高校生・大学生別の「重い」の転移容認度下位尺度間の相関係数を表4に示す。高校生においても大学生においても「+深刻」は「+不快」と有意な正の相関を示した。一方、大学生では「+深刻」と「+重量」との間に有意な負の相関が認められた。

表4: 「重い」の高校生・大学生別の相関係数

	+深刻	+不快	+重量
+深刻	—	.39 ***	.02
+不快	.39 ***	—	.01
+重量	-.14 *	.04	—

\*  $p < .05$ , \*\*\*  $p < .001$ 

右上: 高校生, 左下: 大学生

## 4.2 「軽い」の転移容認度の結果

## 4.2.1 転移容認度尺度の分析

まず、「軽い」を含む30項目に対して主因子法による因子分析を行った。固有値の変化は5.72, 3.49, 2.74, 1.33, 1.24, …というものであり、3因子構造が妥当であると考えられた。そこで、再度3因子を仮定して主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、十分な因子負荷量を示さなかった3項目を分析から除外し、再度主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。プロマックス回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を表5に示す。なお、回転前の3因子で27項目の全分散を説明する割合は42.3%であった。

第1因子は13項目で構成されており、「軽い罪」「軽い罰」「軽い処分」など「軽い」の辞書の意味分類のうち「II 程度が低くて深刻でない様子」に含まれる項目が高い負荷量を示していた。そこでこの因子を「-深刻」因子と命名した。

第2因子は10項目で構成されており、「軽い足取り」「体が軽い」「気が軽い」など意味分類「I 物理的・心理的に重量がない様子」の「心理的軽快さ」と「身体的軽快さ」に含まれる項目が高い負荷量を示していた。そこでこの因子を「-不快」と命名した。

第3因子は「軽い石」「軽い荷物」「軽い体重」「軽いドア」の4項目で構成されており、すべて

表5: 「軽い」の転移容認度尺度の因子分析結果  
(プロマックス回転後の因子パターン)

	I	II	III
(22)罪	.79	-.12	.01
(23)罰	.77	-.07	.01
(17)処分	.69	-.08	-.07
(18)税金	.59	-.11	-.03
(9)傷	.47	.03	.17
(28)労働	.47	.08	.07
(24)役目	.47	.24	-.04
(20)任務	.47	.18	-.07
(14)責任	.47	.05	-.11
(4)病気	.45	-.01	.19
(2)罰金	.45	-.13	.19
(26)問題	.35	.25	-.08
(3)身分	.35	.11	-.01
(25)足取り	-.11	.69	.15
(16)体	-.04	.68	.04
(27)気	.03	.61	-.12
(7)気分	-.10	.60	-.02
(11)心	.08	.53	-.14
(1)雰囲気	-.09	.51	-.07
(29)腰	.07	.49	.20
(10)身	-.02	.43	.36
(19)意味	.22	.41	-.10
(30)口	.19	.34	-.08
(15)石	.00	-.02	.80
(12)荷物	.02	-.02	.78
(21)体重	-.04	.04	.66
(8)ドア	.09	-.06	.66
因子間相関	I	II	III
I	—	.26	.12
II		—	-.07
III			—

「軽い」の基本義に属する項目である。そこでこの因子を「—重量（基本義）」と命名した。

#### 4.2.2 下位尺度間の関連

「軽い」を含む表現の類推傾向をあらわす3つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出し、「—深刻」下位尺度得点（平均 2.72, SD 0.48）、「—不快」下位尺度得点（平均 2.41, SD 0.52）、「—重量」下位尺度得点（平均 2.27, SD 0.80）とした。内的整合性を検討するために各下位尺度の $\alpha$ 係数を算出したところ、「—深刻」で $\alpha = .83$ 、「—不快」で $\alpha = .79$ 、「—重量」で $\alpha = .81$ と十分な値が得られた。

「軽い」の転移容認度の下位尺度間相関を表6に示す。「—深刻」が「—不快」、「—重量」と有意な正の相関を示した。「—重量」と「—不快」との間には有意な相関は認められなかった。

表6：「軽い」の転移容認度の下位尺度相関と平均, SD,  $\alpha$ 係数

	—深刻	—不快	—重量	平均	SD	$\alpha$
—深刻	—	.29 ***	.14 **	2.72	0.48	.83
—不快		—	-.03	2.41	0.52	.79
—重量			—	2.27	0.80	.81

\*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

#### 4.2.3 高校生・大学生の差の検討

高校生・大学生の差の検討を行うために、「重い」の転移容認度の各下位尺度得点について  $t$  検定を行った（表7）。その結果、「—不快」下位尺度（ $t(505) = 1.99, p < .05$ ）について、高校生よりも大学生の方が有意に高い得点を示していた。「—深刻」下位尺度（ $t(502) = 1.44, n.s.$ ）と「—重量」下位尺度（ $t(514) = 0.91, n.s.$ ）については高校生と大学生の得点差は有意ではなかった。

表7：「軽い」の高校生・大学生別の平均値とSDおよび  $t$  検定の結果

	高校生		大学生		$t$ 値
	平均	SD	平均	SD	
—深刻	2.68	0.50	2.74	0.47	1.44
—不快	2.34	0.53	2.44	0.52	1.99*
—重量	2.22	0.75	2.29	0.82	0.91

\*  $p < .05$

#### 4.2.4 高校生・大学生別の相関

高校生・大学生別の「重い」の転移容認度下位尺度間の相関係数を表8に示す。高校生においても大学生においても「—深刻」は「—不快」、「—重量」と有意な正の相関を示した。一方、大学生では「—不快」と「—重量」との間に有意な負の相関が認められた。

表8: 「軽い」の高校生・大学生別の相関係数

	-深刻	-不快	-重量
-深刻	—	.17 *	.19 *
-不快	.34 ***	—	.14
-重量	.12 *	-.11 *	—

\*  $p < .05$ , \*\*\*  $p < .001$ 

右上: 高校生, 左下: 大学生

#### 4.3 「重い」と「軽い」の転移容認度差の検討

##### 4.3.1 高校生・大学生全体の差の検討

「重い」と「軽い」の転移容認度尺度はともに3因子構造をしており、その3因子は「重い」については「+深刻」「+不快」「+重量(基本義)」、「軽い」については「-深刻」「-不快」「-重量(基本義)」とそれぞれが意味的に対称関係となっている。そこで「重い」と「軽い」の転移容認度の差を検討するために、それぞれの下位尺度得点について  $t$  検定を行った(表9)。その結果、「+/-深刻」下位尺度 ( $t(846.76)=5.48, p < .001$ ) と「+/-重量」下位尺度 ( $t(898.68)=4.44, p < .001$ ) については「重い」よりも「軽い」の方が有意に高い得点を示していた。一方、「+/-不快」下位尺度 ( $t(947)=9.71, p < .001$ ) については、「軽い」よりも「重い」の方が有意に高い得点を示していた。

表9: 「重い」「軽い」別の平均値とSDおよび  $t$  検定の結果

	「重い」		「軽い」		$t$ 値
	平均	SD	平均	SD	
+/-深刻	2.53	0.58	2.72	0.48	5.48 ***
+/-不快	2.74	0.53	2.41	0.52	9.71 ***
+/-重量	2.02	0.90	2.27	0.80	4.44 ***

\*\*\*  $p < .001$ 

##### 4.3.2 高校生・大学生別の差の検討

表10は高校生における「重い」と「軽い」のそれぞれの下位尺度得点について  $t$  検定を行った結果を示したものである。「+/-深刻」下位尺度 ( $t(361.96)=2.32, p < .05$ ) において「重い」よりも「軽い」の方が有意に高い得点を示していた。一方、「+/-不快」下位尺度 ( $t(373)=6.34, p < .001$ ) については、「軽い」よりも「重い」の方が有意に高い得点を示していた。「+/-重量」下位尺度 ( $t(373.64)=1.52, n.s.$ ) については有意な差は認められなかった。

表11は大学生における「重い」と「軽い」のそれぞれの下位尺度得点について  $t$  検定を行った結果を示したものである。「+/-深刻」下位尺度 ( $t(423.10)=5.03, p < .001$ ) と「+/-重量」下位尺度 ( $t(448.78)=4.55, p < .001$ ) については「重い」よりも「軽い」の方が有意に高い得



点を示していた。一方、「+/-不快」下位尺度 ( $t(572)=7.85, p<.001$ ) については、「軽い」よりも「重い」の方が有意に高い得点を示していた。

表10：高校生の「重い」「軽い」別の平均値とSDおよびt検定の結果

	「重い」		「軽い」		t 値
	平均	SD	平均	SD	
+/-深刻	2.54	0.61	2.68	0.50	2.32 *
+/-不快	2.69	0.54	2.34	0.53	6.34 ***
+/-重量	2.09	0.91	2.22	0.75	1.52

\*  $p < .05$ , \*\*\*  $p < .001$

表11：大学生の「重い」「軽い」別の平均値とSDおよびt検定の結果

	「重い」		「軽い」		t 値
	平均	SD	平均	SD	
+/-深刻	2.52	0.55	2.74	0.47	5.03 ***
+/-不快	2.79	0.52	2.44	0.52	7.85 ***
+/-重量	1.95	0.88	2.29	0.82	4.55 ***

\*\*\*  $p < .001$

## 5. 考察

### 5.1 英語学習経験年数と類推傾向

本研究は高校生と大学生を調査対象としているが、「重い」においては「+深刻」、「+不快」、「+重量（基本義）」の3因子いずれについても両者の類推傾向に有意な差は認められなかった。一方、「軽い」においては「-深刻」、「-重量（基本義）」については有意な差は認められなかったが、「-不快」については大学生の方が高校生よりも転移の容認度が低い、すなわち「表せない」とする傾向が有意に認められた。また、転移容認度下位尺度間の相関では、大学生においてのみ、「重い」では「+重量」と「+深刻」の間に、「軽い」では「-重量」と「-不快」との間にそれぞれ負の相関が認められた。

本来ならば、英語学習年数が多くなればなるほど語義の拡張も進み、基本義からの類似性のリンクが形成されると期待されるが、今回の結果からはその逆の傾向が認められた。すなわち英語学習経験が多い大学生において、基本義とそこから比喩的に拡張した語義との間により明確な境界を認識する傾向が示されており、日本語の心的語彙と英語の心的語彙の分化が進んでいる可能性が示された。このことを検証するためには今後さらに調査分析を進める必要がある。

また、大学生において「重い」「軽い」の転移容認度に関して、たとえ意味的に対称関係にある形容詞対であっても、その転移の可能性は対称的なものではないとする傾向が高校生よりも明確になされていた。この要因についての考察は次節で行うこととするが、ここで指摘できるのは、語彙に関する大学生の認知構造は高校生よりも複雑になっているという点である。一般に、語彙

習得のプロセスにおいては、過剰一般化(overgeneralization)という現象が起こることがある。既習の規則があると、それが適用されないものにまで類推によって過剰にその規則を適用しようとすることであり、それが容認されないことが指摘されることにより規則は修正されていく。これはボトムアップ的なスキーマ拡張プロセスであるが、この現象は一般的に、大人よりも、認知能力がまだ十分に成熟していない子供に起こりやすい。言い換えれば、子供の認知過程は大まかではあるが柔軟性があり、規則を大胆に応用することができるということである。この視点から今回の調査結果を見てみると、大学生の方が転移容認に関しては高校生よりもやや消極的であり、日本語における規則を英語に応用するという一般化は起こりにくい状況が示された。日本人英語学習者において多義語の語義拡張がなされにくいという問題点と学習者の総合的な認知レベルとの関連については今後さらに検証を行う必要がある。

## 5.2 転移可能性を類推する手がかり

本研究の結果から、対の概念であるにも関わらず「重い」「軽い」の転移容認のされ方には差異が認められた。その内容は、「+/-重量」、「+/-深刻」因子において「重い」の方が「軽い」よりも「表せる」という肯定的評価、すなわち転移容認度が有意に高く、逆に、「+/-不快」因子については「軽い」の方が「重い」よりも転移容認度が有意に高いという結果であった。

「重い-軽い」のような「計量」形容詞の場合、対立する対概念のうち、先にあるものが意味的に無標、後にあるものが有標であるとされている<sup>vi</sup>。無標とは特別な理由がなければ当然のこととして期待されるような、普通の表現の意味構造であり、一方、有標とは特別な理由のために、他の意味的要素が無標の意味に付加された構造を意味する。

「重い」の結果において、「+重量」に高い因子付加量を表した表現項目のうち、負荷量の多いものから順に挙げると「荷物」「石」「体重」「ドア」となっている。いずれも具象物であり重量を有するため、「重い」に対しては無標であるが、「その荷物の重さは？」に対し「そのドアの重さは？」の容認度は低く、「荷物」に対する「重い」の無標性と「ドア」に対する無標性には差があるといえる。そしてその容認度の差が因子負荷量の差として現れていると考えられる。同様に、「+深刻」因子に関しては、高い因子負荷量を示した項目は、高い順に「罪」「罰」「処分」「税金」…であり、いずれも抽象的な概念であるが、それぞれ「その罪の重さは？」「その罰の重さは？」「その処分の重さは？」「その税金の重さは？」という表現の容認度は高く、これらに対する「重い」の無標性は高いといえる。

一方、「+不快」因子に関しては、高い因子負荷量を示した項目は、高い順に「気」「心」「頭」「気分」…であり、いずれも抽象的な概念であるが、「+深刻」の場合と異なり、「あなたの気の重さは？」「あなたの心の重さは？」「あなたの頭の重さは？」「あなたの気分の重さは？」といった表現の容認度、すなわちこれらに対する「重い」の無標性は低い。以上から、ある名詞が形容

詞と共起する場合、その形容詞の、その名詞に対する無標性が高ければ高いほど、転移容認度が高くなるという仮説が導かれる。

しかしこの仮説は、「+/-重量」、「+/-深刻」因子において「重い」の方が「軽い」よりも「表せる」という肯定的評価、すなわち転移容認度が有意に高くなっていた理由を説明することは可能であるが、「+/-不快」因子について「軽い」の方が「重い」よりも転移容認度が有意に高くなっていたという結果を解釈するには不十分である。

「重い—軽い」に対する無標性・有標性の度合いが低い「気」「心」「頭」「気分」などの表現の場合、どのような要因が転移可能性を類推する手がかりになっているのだろうか。そこで表現の意味をみると、「気が重い」はネガティブな状況を表すが、「気が軽い」は逆にポジティブな状況を表す。その他の「+/-不快」因子に属する項目についても同様に「重い—軽い」＝「ネガティブ—ポジティブ」という対立関係が成り立ち、ここから意味がよりポジティブなほうが転移容認度も高くなるという仮説が導かれる。

今後は、①ある名詞が形容詞と共起する場合、その形容詞のその名詞に対する無標性が高ければ高いほど、転移容認度が高くなる、②無標性が低い場合は、ある表現が表す意味内容がポジティブなものの方がネガティブなものよりも転移容認度が高くなる、という二つの仮説について検証を行う必要がある。

## 引用文献

- 青谷法子. 2003a. 「第二言語学習者における語彙ネットワークの拡張に関する心理言語学的研究」. 中部地区英語教育学会紀要、33号. pp9-16.
- 青谷法子. 2003b. 「形容詞「重い」の意味ネットワークに関する心理言語学的研究」. 東海学園大学研究紀要、第8巻、第2号. pp51-67.
- 青谷法子. 2004. 「形容詞「重い」の意味類推についての研究」. 東海学園大学研究紀要、第9号(分冊2). pp67-80.
- Kellerman, E. 1977. "Towards a Characterization of the Strategy of Transfer in Second Language Learning." *Interlanguage Studies Bulletin* 2/1. pp53-145.
- Kellerman, E. 1978. "Transfer and non-transfer: where we are now." *Studies in Second Language Acquisition* 2. pp37-57
- Quirk, R. et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*, London/New York: Longman
- 飛田良文、浅田秀子編. 1991. 『現代形容詞用法辞典』. 東京堂出版.
- 山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』. くろしお出版.

i 4通りのうち3通りの表現は基本義での「重い」の使用であった。

ii 青谷(2003)での調査実施校と同一であるが、調査対象は重複していない。

- iii 「頭が重い」→「身が軽い」、「まぶたが重い」→「体が軽い」、「重い地位」→「軽い身分」にそれぞれ変更した。
- iv 本調査の対象者は高校生 225名（男 87名、女 138名）、大学生 226名（男 73名、女 153名）である。
- v 『現代形容詞活用辞典』の意味記述による。
- vi 例えば「その荷物の重さはどれくらいですか？」という質問は可能であるが、「その荷物の\*軽さはどのくらいですか？」という質問は特別な理由がなければ意味的容認度は低い(Quirk *et al.* 1985)。このような無標-有標の形容詞対には他に「長い-短い」「高い-低い」「古い-新しい」などがある。